

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-190	12-132	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)		
<p>Changes in alcohol consumption after a natural disaster: a study of Norwegian survivors after the 2004 Southeast Asia tsunami.</p> <p>自然災害後のアルコール摂取の変化：2004年東南アジア津波後のノルウェー人生存者の研究</p>		
執筆者		
Nordløkken A, Pape H, Wentzel-Larsen T, Heir T		
掲載誌		
BMC Public Health. 2013 Jan 22;13:58.		
キーワード		
アルコール使用、災害、心的外傷性ストレス、疫学		
要 旨		
<p>目的：</p> <p>多くの研究で災害への遭遇はその後のアルコール摂取の増加と関連することが示されている。これらの研究の多くは、後ろ向きの自己申告によるアルコール使用の変化によるものである。本研究の目的は、災害への遭遇と飲酒行動の関連を自己認識のアルコール摂取の変化と災害に遭遇した異なる地域集団の現在の飲酒習慣の両方のデータを分析し、より綿密に検討することである。</p> <p>方法：</p> <p>対象者は2004年東南アジア津波の影響を受けた地域に住む18歳以上のノルウェー人、899名で、災害の6ヶ月後に郵送による質問調査より評価された。津波の体験についての詳細な質問に基づき、対象者は災害遭遇の地域によってグループ化された。出来事インパクト尺度は心的外傷性ストレスのレベルを計測するために使われた。対象者は災害後アルコール摂取が増加したのか、低下したのかを問われた。さらに、一週間のアルコール摂取と過去一ヶ月間の中毒の頻度を現在飲酒行動の指標として使用した。</p> <p>結果：</p> <p>ひどく被害を受けた人々は被害が少なかった人々より、アルコール摂取が変化したとより多く回答した。ひどい津波の被害は、自己申告のアルコール摂取の上昇 (OR 21.38, 95%CI 2.91-157.28)、及び減少 (OR 7.41, 95%CI 1.74-31.51) とともに関連した。心的外傷性ストレスを補正するとオッズ比は減少し、有意ではなかった。1週間の摂取と過去一ヶ月間の中毒の頻度は災害の遭遇の地域によって変わらなかった。</p> <p>結論：</p> <p>我々の結果は、ひどい災害への遭遇がアルコール摂取の自己認識の変化に与える影響は両極性であることを示した。すなわち、災害への遭遇は自己申告のアルコール摂取の上昇、及び減少と関連した。しかしながら、災害への遭遇と現在飲酒行動の指標との関連の欠如は、観察された両極性の効果が特性とリコールバイアスのため過剰評価されているかもしれないことを示した。</p>		